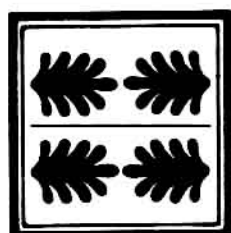


世界鉄道推理傑作選2

小池 滋編

講談社文庫



講談社文庫

世界鉄道推理傑作選 I

小池 滋編

昭和54年 4 月15日第 1 刷発行

昭和54年 6 月29日第 2 刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

© Shigeru Koike 1979

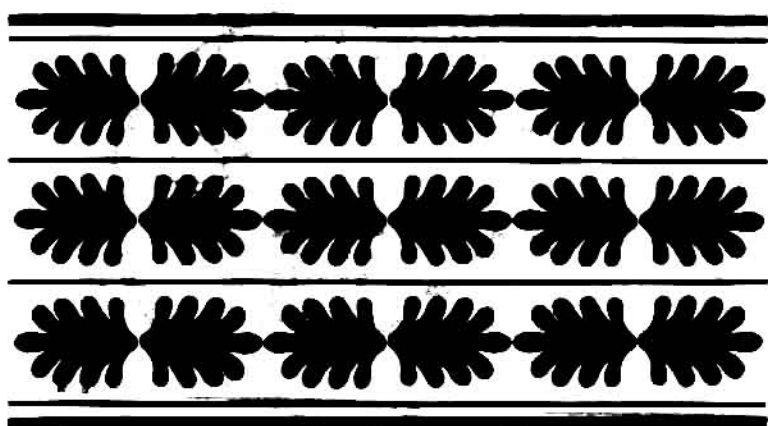
Printed in Japan (翻)

0197-372259-2253 (0) 260円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

世界鉄道推理傑作選 1

小池 滋編



講談社

目次

ステッキのキズは？

M・M・ボドキン

中野康司訳

七

ロンドン中北鉄道の惨劇

V・L・ホワイトチャーチ

小池 滋訳

二七

盗まれたネックレース

V・L・ホワイトチャーチ

小池 滋訳

五二

モアハンプトンの怪事件

作者不詳

小池 滋訳

七五

オスカー・ブローズキー事件

R・オースティン・フリーマン

中野康司訳

八九

列車に御用心

エドマンド・クリスピン

中野康司訳

一六二

解説

小池 滋

一七九

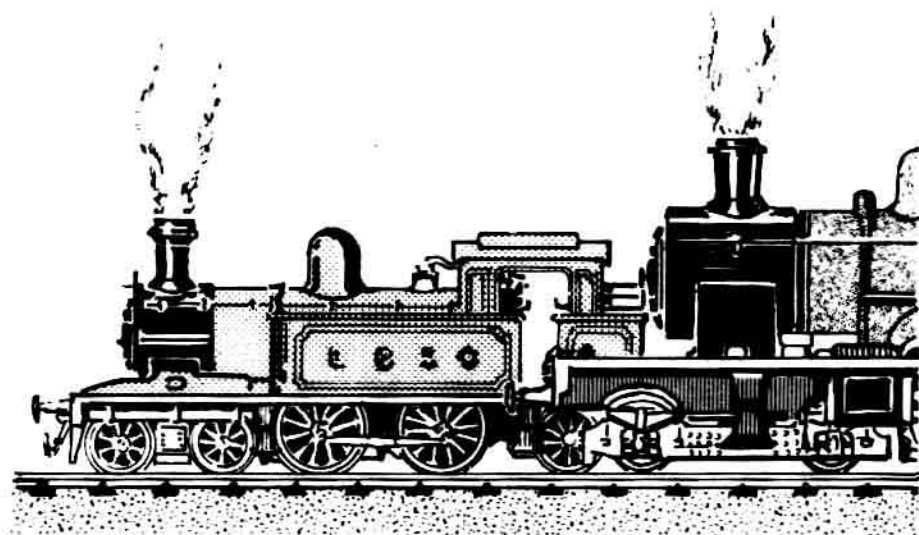
カット・鈴木伸一

世界鐵道推理傑作選
1

ステッキのキズは？

M・M・ボドキン

中野康司訳



がつちりした牛皮製の、黒い小さな旅行鞆を列車に上げると、彼はやっと安心したように一息つき、そして、誰もいないコンパートメントの座席の、自分のすぐそばに、その鞆を大事そうに置いた。

彼は、その鞆をやつとの思いで列車に上げたのだが、まだ若くてがつちりした大男だった——見ようによつては、男前に見えないこともなく、麦わら色の髪と口髭をもち、丸顔で、おだやかな正直そうな顔をしているが、あまり利口そうではない。そして、淡いブルーの眼が、いかにも何か心配そうで、落着かなかつた。かわいそうに、無理もない！ 彼は今、重大な責任を負わされてゐるのだ。あのごくありふれた黒い旅行鞆の中には、じつは、金貨と紙幣で五千ポンドもの大金が入っており、彼は——あの有名なガウアー・アンド・グラント銀行の行員である——それをロンドンの本店から、鉄道で二百マイル離れた支店まで届けに行くところなのである。

いつも金を運ぶ役目をしている、先輩のベテラン銀行員が、いよいよの時になって、不思議に

も突然病気になってしまった。

「ジム・ポロックがいい」と代理を捜して部屋を見まわしながら、店長が言った。「彼なら大丈夫だ。彼ほどの大男なら、邪魔するやつはみんな叩きのめしてしまうさ」

というわけで、ジム・ポロックは、突然重大な責任を負わされてしまったのである。これがラグビーの試合ならば、イギリスじゅうのどんな男に向かってでも、露恐れずに猛然とタックルして行く大男も、今は二歳の童子のようにびくびくしていた。ここへ着くまでは、彼の油断のない眼と、たくましい右腕は、片時たりとも鞆から離れなかった。だが、ここエディンブーム駅で、すでに一等車両の個室に乗りこんで鍵をかけてしまった。これで、次の停車駅まで、四十七マイルは安全というわけである。

そこで、ほっと溜息をついて肩をすくめると、彼はびくびくした気持をふり捨て、ふかふかした座席にどっかりと腰をおろし、ふんぞり返ってパイプに火をつけ、そして、ポケットからスポーツ新聞をとり出すや、たちまち、世界ラグビー選手権大会の記事に熱中してしまった。というのも、ジム自身、近い将来、選手になる望みがないわけではなかったからである。

列車はガタゴトと駅を離れ、やがてなめらかに、快適になり、そして、広々とした平野をゆうに時速五十マイルで突き進んだ。

依然として新聞に熱中しているジムは、向かい側の座席の下の暗がりから、キラリと光る鋭い眼が二つ、そつと彼をうかがっているのに気がつかなかった。やがて、その長い、しなやかな、ひきしまった身体が、まるでヘビのように、そつと身をほどいて床へ這い出てきたのにも気がつ

かなかった。

何も気がつかなかったし、突然ものすごい力で喉元をつかまれて、胸に強烈な膝打ちを食らうまで、何も感じなかった。

ジムは筋骨たくましい大男ではあったが、まだ眠っている力が目を覚まさないうちに、クロロホルムを沁みこませたハンカチを口と鼻孔に押しつけられて、そのままお向けに床に倒れてしまった。

それでも、しばらくの間は死物狂いで暴れ、半分起き上がって、しがみついている敵をもう少しで投げ飛ばすところだった。だが、いかにもがこうと、やがて、麻酔薬に、力と意識を完全に奪われてしまった——彼は再びどきりと倒れ、床の上に丸太のようにころがった。

この忠実一途の男が、気を失う間際に考えたことは、『金がなくなる』ということだった。そして、ひどい頭痛を感じながら、死んだような気絶から目を覚まして最初に考えたことも、やはり同じだった。列車はまだ全速力で走っていたし、部屋の鍵もまだ閉っていた。しかし、部屋はすでに空っぽで、鞆もなかった。

彼は必死になって、網棚や、座席の下を捜した——が、どこにもなかった。ジムは乱暴にガタと窓をあけて、大声でわめいた。

列車は速度をゆるめはじめ、やがてガタゴトと駅に到着した。ポーターが五、六人わつと駆けつけた——駅長のほうは、威厳にふさわしいように、あとからゆっくりやって来た。ドアのまわりは、たちまちヤジ馬でいっぱいになってしまった。

「おれはたった今」とジムは叫んだ。「五千ポンド入った黒い鞆を奪われたんだ！」

それから、駅長がヤジ馬をかきわけてやって来た。

「それで、どこで奪われたんですか？」髪も服も乱してすっかり興奮しているジムを、胡散臭^{うさんくさ}そうに眺めながら駅長は言った。

「こことエディスクーム駅の間さ」

「そいつは不可能です。こことエディスクーム駅の間には、どこにも止まらないんだし、部屋にも誰もいないじゃないですか」

「エディスクーム駅では、誰もいないと思ったさ。きっと、座席の下に隠れてやがったんだ」

「座席の下にも、今は誰もいませんよ」駅長はそっけなく言い返した。「警察に話したほうがいいですね。ホームに刑事係の巡査がいますから」

ジムが巡査に事の顛末^{てんまつ}を話すと、巡査は、まじめに彼の話を聞いてから、「事件が解決するまで、あなたの身柄を勾留しなければなりません」とジムに告げた。

エディスクーム駅に電報を打つと、通信が途絶えていることがわかった。これはつい今しがた起こったことにちがいがなかった。ほんの一時の間前には、電信はちゃんと通じていたのである。破損箇所は、エディスクーム駅を出て九マイルほどの所に、すぐに発見された。電線が数本だらんとたれ下がり、電柱の上の絶縁器が粉々になっていた。また、その付近の地面がおびただしい足跡で荒らされており、足跡は、畑を二つ三つ突っ切ってから、広い道路へ出て消えていた。この他には、事件の手掛かりは何も現われなかった。

その翌々日のことである。ドロー・マールが、みずから仕事部屋と呼んでいる小さな客間にすわって仕事に熱中していると、《グレゴリー・グラント準男爵》と記された名刺が届き、名刺のあとから、風采の立派な、温和な感じの中年の紳士が現われた。

「マールさんですか？」と紳士は手をさし出しながら言った。「あなたのことは、友人のミリセント卿からうかがいました。じつは、どうしてもあなたのお力をお借りしたくてまいったのです。私は、ガウアー・アンド・グラント銀行の頭取でございます。すでに、列車強盗のことはお聞きおよびのことと思いますが」

「ええ、新聞で知るかぎりのことは聞いております」

「それ以上申し上げることはほとんどございません。マールさん、じつは、私は個人としてあなたをお訪ねしているのです。と申しますのは、私はこの事件に、個人的に非常に深い関心を持っているのです。いえ、お金の問題ではありません——むろん、金額も大へんなものです。ですが、むしろ、銀行の名誉にかかわる問題なのです。私共は、行員の好待遇をいつも自慢にしてきましたし、その努力は十分報われてもきました。ほとんど百年もの間に、行員の不正行為はただの一件も起きていないのです。これは、私共の銀行の名誉ある記録です。できますなら、この記録を破られたくないのです。現在、ジェームズ・ポロック青年に強い嫌疑がかけられております。彼が本当に有罪であるのなら、もちろん罰していただきたい。しかし、もし無実であるのなら、自由にしてあげたいのです。こういうわけで、お訪ねした次第です」

「警察の考えはどうなんですか？」

「それなんです、警察は、彼の有罪は絶対間違いないと確信しているのです。警察の考えは、終始一貫変わりません。つまり、コンパートメントには誰もいなかったし、誰もそこから出ることはできなかった。ポロックは、線路わきで待っていた共犯者に鞆を投げたのだ、というわけです。地面に重い鞆が落ちた跡があったとさえ、警察は言っています——電線がたれていた地点より、二、三百ヤードほどエディスクーム寄りの所です」

「それで、警察はどうしました？」

「青年を逮捕して、牛皮製の重い鞆を持った男の手配書を出しました——それだけです。とにかく、主犯はすでに逮捕したと、彼らは確信しているのです」

「それで、あなたはどうなんですか？」

「マールさん、あなたには正直に申し上げます。私は、警察の考えには疑いを持っております。たしかに、この事件は、議論の余地がないようにも思われます。全速力で走っている列車から姿を消すことなど、誰にも出来るはずがございません。ですが、私は青年に会いまして、どうにも釈然としないのです」

「彼に会えるかしら？」

「それはもう、そうして頂ければありがたいです」

ジム・ポロックと五分ほど話してから、ドーラは、グレゴリー卿をわきへ呼んだ。

「大体の見通しはつきました」と彼女は言った。「二つだけ条件をきいてくだされば、事件をお引受けします」

「謝礼のことでしたらもう……」

「いえ、謝礼のことではございません。事件が解決するまでは、謝礼のことは口にしない主義です。ポロック氏を、手助けに貸してくだされば、事件をお引受けします。グレゴリー卿、あなたの勘は当たっていましたわ。あの青年は無実です」

銀行を代表して、『原告の訴訟中止の同意書』が提出され、ジェイムズ・ポロックが釈放されると、警察側から大へんな不満が起こり、それなら、刑事訴訟に訴えるまでだ、と盛んに息巻いた。

一方、ポロックは、ドーラ・マール女史とともに、朝の列車でロンドンからエディスクームへと向かった。彼は感謝と献身の気持であふれ、列車の中では、もちろん強盗の話になった。

「ポロックさん、鞆はとても重かったんですね？」とドーラが訊いた。

「はい、マールさん、あいつを十マイルも運ぶのは、遠慮したいです」

「でも、あなた、とても力がありそうじゃないの」

ドーラがそう言って、彼のより上がった腕の筋肉を、指先で、職業的にちよつとさわると、彼は髪の毛の生えぎわまで真っ赤になってしまった。

「強盗の顔は、もう一度見ればわかりますか？」とドーラは訊いた。

「いいえ、全くわかりません。とにかく、何が何だかわからないうちに、いきなりのどをしめつけられて、クロロホルムをかがされてしまったんです。エディスクームを出てから、九マイルか十マイルの所でした。マールさん、たしかに、男がいたんです。信じてくれますね？ あなた以